

アルゼンチンの日系社会(海外だより)

著者	宇佐見 耕一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	7
号	1
ページ	30-31
発行年	1990-03-20
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006575

アルゼンチンの日系社会

宇佐見 耕一

(在ブエノスアイレス海外派遣員)

80年代のアルゼンチンは高いインフレと低成長・マインナス成長という経済危機にみまわれ、それが社会情勢にも反映しさまざまな社会問題を引き起こしている。またアルゼンチンには約3万人から4万人といわれる中南米有数の日系人社会が存在しているが、この在亜日系社会も経済危機の影響を色濃く受けている。そこで今回はアルゼンチンの日系社会の現状について報告をおこなう。

歴史 アルゼンチンにおける日系移民の歴史は1886年の牧野金蔵氏のコルドバ移住に始まるとされ1986年は日系移民100年祭がおこなわれた(しかし、この100年祭事業は在亜日系社会に分裂抗争を引き起こす結果となった)。日系移民の歴史はこの牧野金蔵氏に始まる戦前移民、第二次世界大戦による中断、戦後移民、日本の経済復興に伴う移民流入の停止、アルゼンチン経済情勢悪化にともなう出稼ぎの流行及び帰国者の出現と言う段階に分けることができる。

戦前のアルゼンチン移住は政府主導による組織的な移民は行われず、以下の二種類の移民形態が主流であった(1898年にワシントンで日亜友好通商航海条約が調印されたが移民に関する規定はなかった)。すなわち、移民は呼び寄せ等により日本から直接アルゼンチンを目指してきたものと、ブラジルやペルー等の近隣諸国にまず入植し、そこからアルゼンチンに再度向かった者がある。また後に、日系社会の多数派となる沖繩移民は1908年に最初の記録を見出すことができる。戦後の日系人移住者数としては1914年の国勢調査では在亜日本人1007人と数字がある。日本人移住者は1930年までに3000~4000人に増大し、1941年には7000人に

達したという。戦前日系移住者の職業としては1930年の恐慌まではカフェテリアが有名であり、また花卉栽培、野菜栽培、洗濯業に進出するものが多かった。

こうした移民の流れは第二次世界大戦で一時中断する。戦後の日亜関係は1952年の国交回復をもって正式に再開された。日本からの移民は、日本の敗戦による国土の荒廃により戦争終了後急増していった(第二次世界大戦後移民が急増したのは日本からに限らず、ヨーロッパからは日本を遥かに上回る規模で流入した)。1961年のフロンティシ大統領訪日時に日亜移住協定が締結され、アルゼンチンへの移民を促進させる結果となった。1954年から84年までの間に政府機関(現国際協力事業団等)の仲介による移住者は約2600人、呼び寄せ等の直接移住者は8000人に達したという。これら戦後の日系移民は1975年までに14000人にのぼるといふ。しかしこうした移民の流入も日本の経済復興とともにその数は減少してゆき、とくに1970年代になると大幅に移民の数は低下するのである。そして1980年代後半になると日本経済がまさに未曾有の繁栄を享受する一方、アルゼンチン経済は深刻な危機が続き出稼ぎ等の移民の逆流現象がみられるに至ったのである。

在亜日系社会 在亜日系人の人口に関する正確な調査はいまのところ存在しない。しかし、1980年の国勢調査では在亜日本人は7755人であるとされ、それを基にした二世、三世を含めた日系人は推定3万3000人であるとされている。一方、1986年に行なわれた移民局(Dirección Nacional de Migraciones)によるサンプル調査を基にした計算では、日系人口を4万人と推定している。この調査ではまた一世の高齢化現象が明らかとなった。

それによると一世の平均年齢は55歳とされ、アルゼンチンの日系社会が二世、三世の時代に入りつつあることを示している。また、これら日系人の70%は沖繩出身者かその子孫であることもアルゼンチンの日系社会のひとつの特色である。そしてこれら日系人の約8割が大ブエノスアイレス首都圏に居住していると言われている。

アルゼンチン、特にブエノスアイレスでは日本人といえば洗濯屋か花作りであるというイメージができあがっている。事実、1980年の調査によると全日系人家庭8853戸のうち洗濯業を営む家庭が3221戸（36.4%）、花卉栽培を営む家庭が1460戸（16.5%）となっている。しかし日系社会の中心が二世や三世に移るにつれ、日系人の学歴も上がり、サラリーマンや医師・弁護士等を営む家庭は2447戸（27.6%）と花卉栽培業を抜いて職業別では第2位となっている。

ただし、日系人の社会的進出という点に限ればブラジルの日系人と比較した場合、限られていると言わざるを得ない。職業的にもプロフェッショナルレスが拡大する方向にあるとはいえ、まだまだ洗濯業と花卉栽培が主流であり政界への進出などは皆無に等しい。これはひとつには在亜日系人の人口が最大でも4万人というような圧倒的少数派であるという事実根ざしていることは確かであろうが、他方で日系人の日系以外との結婚率が3%であるという推計も存在する。

日本出稼ぎ 最近の日系社会の顕著な特色として日本への出稼ぎの現象がある。経済的繁栄を享受する日本とは対照的にアルゼンチンでは経済危機が慢性化していった。この経済危機は日系人の主要就業職種である花卉栽培業をまず直撃した。花卉栽培業者は輸出や債務返済に関する問題を抱え、その経営に苦慮していた。他方洗濯業の方も競争の激化やクリーニングを必要としない服の広まりによりその経営状態は悪化していた。こうした状況のなかで在亜日系人の日本出稼ぎが始まったのである。

一般に日系人が日本へ出稼ぎに行く場合、当地の旅行代理店が仲介の役割を果たしている。これらの仲介業者は仕事を斡旋するのみではなく、日本での住宅から航空券にいたるまでの世話をする。他方日本国籍を持たない二世や三世のなかには観光ビザで入国し就労している者もいるという。出稼ぎ者の募集は現地日系紙における出稼ぎ者募集の広告によるものや口コミ等により行なわれている。また日本出稼ぎ帰国者の成功話も出稼ぎを誘発させる要因として作用している。在亜日系人の多くは中産階級に属するとはいえ、その月収と日本で期待できる収入との間とは大きな開きがあり、出稼ぎの現象を促進させている。

当初、在亜日系人たちは、文字通り日本へ何年か出稼ぎにゆき貯金をした後、アルゼンチンへ帰国することを考えていた。しかし、なかにはアルゼンチンの状況に見切りをつけて永住帰国するものも出現している。これは戦前の移民が一攫千金を夢見て来亜し蓄財の後帰国を考えていたものが、アルゼンチンに定着してしまった事実を想起させる。

現在日本へ出稼ぎに行っている者の人数は正確に把握されていない。日本大使館では約5000人であろうとの推計を出しているが、実際はそれを上回る数の日系人が出稼ぎに出ていると現地日系社会ではいわれている。この数は在亜日系人を4万人と最大に見積もっても実にその12.5%になり、実際はそれ以上であると思われる。日本へ行った二世や三世のなかには風習や言葉の違いに戸惑うものが多いという。実際、アルゼンチンの二世はスペイン語を母国語として育ち、日本語を不自由なく使いこなせる者は少ない。他方、出稼ぎに行く者の中心は青年男子であり、まさに日本の出稼ぎ地帯と同様な問題を引き起こしている。すなわちアルゼンチン側にあっては母子家庭の増加という現象がみられる。当地ではこれを在亜日系社会の空洞化問題としてとらえており、日系社会の将来に対して深い憂慮の声があがっている。